

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：37201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530943

研究課題名(和文) 被虐待児の箱庭技法、コラージュ技法の臨床的特徴

研究課題名(英文) Clinical features of sand play and collage techniques with abused children

研究代表者

西村 喜文 (NISHIMURA, YOSHIFUMI)

西九州大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：40341549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、児童養護施設入所児を対象に、箱庭技法、コラージュ技法を用いて集計調査を行った。具体的方法として、120名の箱庭作品、コラージュ作品を収集し、内容分析(箱庭作品、コラージュ作品の表現特徴)、印象評定分析(表現された作品の印象)を行い、年齢(小学生、中学生、高校生)、入所年齢(乳幼児期、児童期、思春期)、在園年数(0～3年、4～7年、8年以上)、入所理由(直接的虐待、間接的虐待)、箱庭体験(0回、1から5回、6回以上)、コラージュ体験(0回、1から5回、6回以上)ごとに比較検討しその特徴を明らかにした。また、児童養護施設における箱庭療法、コラージュ療法の意義についても考察した。

研究成果の概要(英文)：This study was a tabulation examination of children's home entrance child, using sand play and collage techniques. Specifically, methods involved the collection of 120 sand play and collages, content analysis(expressive features of sand play, expressive features of collages), impression rating analysis(impressions of the works that were presented), and comparative review according to age (elementary school, junior high school, senior high school), age at which they entered the children's home (infancy, childhood, adolescence), length of stay in the children's home (0-3years, 4-7years, 8years and above), reasons for entering the children's home (direct abuse, indirect abuse), number of experiences of sand play (0times, 1-5times, 6times or more), and number of experiences of collage (0time, 1to5times, 6times or more), identifying features. The significance of sand play and collage techniques at children's home is also discussed.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：心理学 臨床心理学

キーワード：臨床心理学 箱庭療法 コラージュ療法

1. 研究開始当初の背景

被虐待児童に対する心理的支援とし2000年より箱庭療法が導入され被虐待児童に対する適切な心理的支援が試みられている。箱庭療法の導入によって、虐待を受けた子どもの心が表現されやすくなったと言える。しかし、箱庭療法以外でも表現できる方法があり、その一つにコラージュ療法があげられる。コラージュ療法の利便性、簡便性、汎用性から児童養護施設など幅広い領域で実施されている。しかし、箱庭・コラージュ表現を内容や印象面から多角的に検討し表現の特徴について分析した報告はなく、児童養護施設における箱庭・コラージュ表現の基礎的研究は、新たな指標として意味のある研究であると考えられる。

2. 研究の目的

児童養護施設入所児の箱庭作品、コラージュ作品による臨床的特徴を明らかにし、箱庭技法やコラージュ技法の有効性について検討を行う。

3. 研究の方法

第1調査 箱庭表現の基礎的調査

(1)調査目的：児童養護施設入所児の作成した箱庭作品を表現特徴、印象評定から分析し、年齢(小学生、中学生、高校生)、入所年齢(乳幼児期、児童期、思春期)在園年数(0~3年、4~7年、8年以上)入所理由(直接的虐待、間接的虐待)、箱庭体験(0回、1から5回、6回以上)ごとに比較検討しその特徴を明らかにした。また性差についても検討した。

(2)調査対象：A・B県内にある児童養護施設入所児童生徒120名(小学生45名、中学生46名、高校生29名)を対象に実施した(表1)。

表1

		学年			計
性		小学生	中学生	高校生	
男子		30	19	14	63
女子		15	27	15	57
全体		45	46	29	120

(3)調査期間：2011年7月から2012年11月(児童養護施設4カ所)。

(4)研究方法と手続き

箱庭および玩具

箱庭用具および玩具に関しては、箱枠、砂の

量、玩具類は各児童養護施設心理担当職員と連絡しあい、条件を統一し実施した。

調査方法

個別で筆者が1対1で制作させた。記録に関しては、筆者が作成した箱庭レコードシートを使い記録した。尚、作品はデジタルカメラを用いて写真により保存した。

印象評定の調査

岡田(1969)の印象評定尺度を用いて箱庭療法の経験のある2名の大学院修了生、1名の臨床心理士に全作品の評価を行ってもらった。

(5)分析方法

箱庭表現特徴

箱庭作品を基礎項目(総玩具数、初動時間、制作時間、砂の使用)、大項目、中項目に分類した。各項目の差の比較は一元配置の分散分析。性差の比較は2元配置の分散分析、及びt検定を行った。本研究での帰無仮説の棄却域は、有意水準5%とした。また、砂の使用は、砂を使って川や池を掘ったり山を作ったりしたことを「あり」砂を触らず玩具を置いたことを「なし」とした。

印象評定分析

岡田(1969)の印象評定尺度を用いて、4つの尺度(統合性、充実性、柔軟性、力量性)と年齢、入所年齢、在園年数、入所理由、箱庭体験との関係について検討を行った。また性差についても検討を行った。結果の処理については、各検討項目との比較を一元配置分散分析、性差を2元配置分散分析で行った。

第2調査 コラージュ表現の基礎的調査

(1)調査目的：児童養護施設入所児の作成したコラージュ作品を形式、内容、印象評定から分析し、年齢、入所年齢、在園年数、入所理由、コラージュ体験ごとに比較検討しその特徴を明らかにする。また性差についても検討した。

調査対象・調査期間は箱庭と同じである。

(2)研究方法と手続き

雑誌：条件を整える意味から共通の雑誌2冊と、各年代の特徴をとらえることを狙い男女の

代表的な雑誌(選択素材)を用意した。

台紙: 白の八つ切り画用紙。裏には、制作日、タイトル、年齢、性別を記入する欄を設けた。画用紙の設定に関しては、制作時間、保存性、利便性を考慮し決定した。

用具: のり、はさみを用意した。

(3)調査方法

各養護施設において、心理担当者、施設関係者に事前に説明を行い理解を得た。また、子ども達とは、事前にふれあう時間をとった。コラージュ制作は、マガジン・ピクチャー・コラージュ法を用いて、5~10人程度のグループで行った。

(4)分析方法

形式分析

切片数と余白量、重ね貼りの有無などをレコードシートに記録し一元配置の分散分析、性差の比較ではt検定を行った。その他の項目には²検定を行った。本研究での帰無仮説の棄却域は、有意水準5%とした。

内容分析

自然風景の写真、人間の写真、動物の写真などをレコードシートに記録し一元配置の分散分析、性差の比較ではt検定を行った。その他の項目には²検定を行った。本研究での帰無仮説の棄却域は、有意水準5%とした。

印象評定分析

今村(2006)の作成したコラージュ作品の印象評定尺度(CISS:Collage Impression Scoring Scale)30項目と、森谷(1998)による判断軸の提案を参考に筆者が作成した印象評定判断軸15項目を用いて、コラージュ療法の実践経験のある3名の大学院生および大学院修了生に全作品を対象として評定を行ってもらい、その平均値を作品の評定値とした。結果の処理については、各検討項目との比較を一元配置分散分析、性差を2元配置分散分析で行った。

箱庭表現とコラージュ表現の相関

箱庭印象評定の4尺度(統合性、充実性、柔軟性、力量性) CISSの下位3尺度(安定性、表

出性、創造性) 判断軸と入所年齢、在園年数、箱庭体験、コラージュ体験の関係をみるため、各下位尺度、判断軸15項目と入所年齢、在園年数、箱庭体験、コラージュ体験の相関係数を算出し、入所年齢、在園年数、箱庭、コラージュ体験ごとの差を比較した。同様に性差についても検討した。また、箱庭印象評定尺度とCISS印象評定尺度との関連性についても検討した。

4. 研究成果

(1)箱庭表現

基礎項目

使用する総玩具数は全体的には女子が多く、年齢的には小学生が一番多く年齢が上がるにつれ玩具数が減少傾向にあり、また、先行研究の健常小学生、中学生、高校生と比較すると、施設入所児の総玩具数は少なかった。初動時間についても、施設入所児は箱庭制作までの時間が長くかかり、制作時間においても年齢が上がるにつれ制作時間が短くなっていった。これらのことより、施設入所児は、自分の内面をうまく表現することができないのではないかと思われ、初動時間が長かったり制作時間が短かったりなどから自己開示に対する抵抗を表していると考えられた。以上のことから、児童養護施設で箱庭療法を行う場合は、施設入所児の表現意欲がわくような十分な時間と治療者との関係作りが必要と思われる。

箱庭内容分析

年齢が上がるにつれ自然を多く使用し($p<.05$)、また、乗り物に関しては、小学生男子4.83、高校生男子1.60であり年齢とともに減少し($p<.05$)、さらに男子が動物を多く使用した($p<.05$)。河合(1969)は、エネルギーの流れを表すのとして自動車や人間の流れ、動物の進行、川の流れなどが表現されるとしている。よって、男子が女子より動的でエネルギーの流れがあり、中でも、高校生より小学生がエネルギーの高さが捉えられた。在園年数でみると、在園年数が短いほど人物を使用せず($p<.05$)、現実生活の中での人間関係が未熟であること

も捉えられる。直接的虐待群において、乗用車、運搬車両を多く使用する傾向がみられた ($p < .05$)。乗り物はエネルギーの流れを表す動的な素材として考えられるが、乗用車やバス、電車などは被虐待児の苦痛を回避させ非現実的世界へと運んでくれるものともとらえられる。箱庭体験から見ると、施設内における箱庭体験の割合を見ると、箱庭の体験がない児童が6割であった。このことは、児童養護施設に心理職が配置され10年以上が経過している中で、箱庭療法が十分に行われていないことが示唆される。

箱庭印象評定分析

男子が女子より「力量性」のある作品を作る傾向がみられた ($p < .01$)。年齢別にみると、小学生が中学生、高校生より「力量性」のある作品、「男性的」な作品を作る傾向がみられた ($p < .05$)。高校生が小学生より「柔軟性」のある作品を作り、また、女子が男子より「柔軟性」「充実性」のある作品を作る傾向も見られた ($p < .05$)。そして、思春期入所群が乳幼児期入所群より「くつろいだ」作品を、児童期入所群が乳幼児期入所群より「愉快的」作品を作ることがとらえられた ($P < .05$)。箱庭体験別にみると、1回~5回制作群が初回制作群より「明るい」「豊かな」「にぎやかな」作品を作る傾向がみられ ($P < .05$)、施設内での数回の箱庭制作が初回制作群より箱庭の表現過程を通して何かを感じる主観的体験をおこない、制作者の中に心の動きの変化があると思われる。箱庭表現に際して同じ人が見守っていくことが何らかの影響を及ぼしそれが箱庭表現の連続性や展開の理解にとって重要な要因の1つであるとされ、施設内での箱庭療法を行う時、見守り手としての専門的なセラピストの必要性が問われ、その中で、箱庭療法を重ねていくことの重要性が示唆される。

(2) コラージュ表現

形式分析

年齢があがるにつれて切片数は減少してい

く傾向がみられた ($p < .05$)。このことは、本研究の箱庭表現の総玩具数の結果とも一致する。箱庭表現の玩具数やコラージュ表現の切片数の減少は精神活動の低下、生産性の減少が考えられる。間接的虐待の女子が切片を多く使用する傾向がみられた ($p < .05$)。余白量は中学生に余白が多かった ($p < .05$)。年齢が上がるにつれて余白量が少なくなっている。中学生に余白量が多いことは、対人関係の表出力・表現力の弱さを現していると思われる。また、1~5回制作している男子にすげかえの割合が高く ($p < .05$)、コラージュ表現をとおして、思春期において直面する「性の取り入れ」の不安や葛藤が表出されると思われる。

内容分析

0~3年在園群、間接的虐待群において自然風景を使用する割合が高かった ($p < .05$)。また、コラージュを6回以上制作している男子においては、コラージュを通して連想が膨らみ自然が増える傾向がみられる ($p < .05$)。このことは、コラージュ表現が不安や葛藤を和らげる効果があるということが示唆される。また、高校生に乳幼児の写真が多かった ($p < .05$)。思春期から青年期にかけて大人に向かう移行期では、自立や自らの性同一性の問題など不安や葛藤が起こりやすいが、施設入所の高校生は自立に向けての葛藤が大きいことが捉えられる。

印象評定分析

「安定性」は中学生(小学<中学生)、「創造性」は高校生(小学生<高校生)の印象が高かった ($p < .05$)。また性差では、男子が「創造性」のある作品を作る傾向がみられた ($p < .01$)。中学生が小学生よりコラージュ表現を積極的に行いバランスの取れた作品を作り、男子は空間的な広さや創造的な空間をもつ作品を作ることがとらえられた。また、乳幼児期入所群のコラージュ作品には、安定した、表出性の高い作品が多いことがとらえられた ($p < .05$)。さらに、8年以上在園群が0~3年在園群より「安定性」「表出性」「創造性」のある作品を作る傾向がみられた ($p < .05$)。

長期在園群が、安定性、表出性の高い作品を作るということは、内面の不安や攻撃性を自分なりに収めようとしているとも考えられる。そして、6回以上制作体験があると安定性、表出性が高くなっており、コラージュ表現を重ねていくことの効用が示唆されたと言える。

箱庭印象評定4尺度と入所年齢、在園年数、箱庭体験との関係

在園年数が長くなると、まとまりのある調和した箱庭作品を作ることは関係があることが伺えた($p<.05$)。よって、在園が長くなると、施設内や学校生活において社会生活能力を身につけ、そこでの人間関係が構築され自分の世界を作っているとも考えられる。また、初動時間が短いと貧弱な、静的な、空虚な、消極的な、小さい作品になる傾向が伺え、総玩具数が多くなると豊かな、充実した、積極的な、にぎやかな作品になる傾向が伺えた($p<.05$)。また、制作時間が短いと小さい作品になり、長くなると深い作品になる。よって、箱庭療法において、表現意欲がわくまでには十分な時間と治療者との関係作りが改めて必要と思われる。

コラージュ印象評定3尺度と入所年齢、在園年数、コラージュ体験との関係

乳幼児期に入所し在園年数が長くコラージュ体験も多くなると、コラージュ作品の「安定性」、「表出性」の印象が高くなることが言えた($p<.05$)。その中でも男子は、入所年齢が下がり、在園年数が長くなり、コラージュ体験が多くなると、まとまった、深い、落ち着いた、意味のある、バランスのとれた作品を作り、女子は美しい、意味のある、安定感のある、メッセージ性の強い作品を作る傾向がとらえられた($p<.05$)。また、在園年数が長くなると、女子はストーリー性のある作品を作り、コラージュ体験が多くなると遠景的な作品を作る特徴が見られた($p<.05$)。コラージュ表現では、内面の葛藤を「近景」に写るような大きな切片で表現する場合がある。遠景は、落ち着きを取り戻し、まとまった、美しい作品となる場合が多い。この

ことから、在園年数が長い群では、コラージュ療法を通して自分の内省化が行われているとも捉えられる。

箱庭印象評定4尺度とコラージュ印象評定3尺度との関係

CISSの「安定性」と箱庭印象評定の「統合性」($p<.01$)、「柔軟性」($p<.05$)に正の相関がみられた。また、男子に箱庭作品印象の「統合性」とコラージュ作品印象の「安定性」、箱庭印象評定の「充実性」とコラージュ印象評定の「表出性」に有意な正の相関がみられ、女子においては、箱庭作品印象の「統合性」とコラージュ印象評定の「安定性」に有意な正の相関がみられた($p<.05$)。今村(2004)は、CISSの3尺度と岡田(1969)の4次元を比較し、「統合性次元」、「柔軟性次元」は、CISSにおける「安定性」にあてはまり、「充実性次元」は「表出性」にあたるとしている。森谷(1990)が、コラージュ療法を箱庭と関連付けながら発案した経緯からも箱庭とコラージュの共通点は多く、作品の印象についても箱庭との共通点が見いだされると思われる。本研究における施設入所児のコラージュ作品のコラージュの印象評定「安定性」「柔軟性」は、信頼性が高いことが言える。また、男子に「統合性」と「安定性」、「充実性」と「表出性」に有意な正の相関がみられたことは、箱庭やコラージュ表現において動きのある表現や感情表出をしているとも考えられる。

コラージュ印象評定の判断軸と入所年齢、在園年数の関係

コラージュ作品をCISS印象評定だけでみるのではなく、森谷の対概念を用いて提案した判断軸を用いて行ってみた。その結果、判断軸においても、在園年数が短いと雑然とした、雑な、非現実的、共存的な、弱い印象の作品がとらえられる($p<.01, p<.05$)。性差でみると、男子は入所年齢が高いと「意味のある」作品を作り、入所年齢が低いと「共存的」な作品を作った。在園年数でみると、在園年数が短いと男女とも雑

然とした作品をつくり、特に女子は「雑な」作品を作った。また、男子は在園期間が短いと「非現実的な」作品を作り、女子は「共存的」「弱い」印象の作品を作った。また、在園期間が長くなると女子は「意味のある」印象の作品を作った。このことはCISSの結果と同じであった。判断軸を用いても印象面をとらえられることが言えると思われる。

今後の課題

今回は、1回きりの箱庭制作、コラージュ制作であった。調査期間中、箱庭やコラージュを取るたびに、調査者側の心の変化に気付かされた。今後の課題として、継続して箱庭表現、コラージュ表現を行うことにより、筆者が体験した心の変容が子どもたちにもあるのではないかと思った。今後、継続した箱庭表現、コラージュ表現の研究も必要と思われる。また、今回調査した各施設において、箱庭療法の用具は整備されてあったが箱庭を体験した子どもたちは4割弱であった。箱庭療法の知識、体験を踏まえた養護施設での実践者が必要と思われる。一方、コラージュは6割程度体験している。コラージュの簡便性や利便性からすると当然であるが、コラージュ作品を読み解く力、子どもたちと作品を通してコミュニケーションを深める専門家の必要性も感じた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

乳幼児のコラージュ表現の特徴 - 印象評定を用いた集計調査 - 箱庭療法学研究
Vol.24 .No1 p.35-49. 2011

乳幼児から思春期・青年期までのコラージュ表現の発達的特徴と臨床的研究
京都文教大学論文博士学位論文 p.1-324
2011

宇宙に引きこもっていた男子高校生との面接過程 - コラージュ表現を通して -
(共著) 山口千貴・西村喜文
コラージュ療法学会誌 Vol.3.No1.
p.15-27. 2012

子どものコラージュ療法 - 児童養護施設での実践 - (共著) 津上佳奈美・西村喜文他
Vol.3.No1. p.15-27. 2012

〔学会発表〕(計7件)

西村喜文「中期うつ女性の夢物語」
日本箱庭療法学会第25回大会
2011年10月15日 東京フォーラム

山口千貴・西村喜文「宇宙に引きこもった男子高校生との面接過程 コラージュ表現を通して」日本コラージュ療法学会第3回大会
長崎大学医学部 2011年8月28日

山口千貴・西村喜文「ADHD的様相を呈する小学生男児との遊戯療法過程」
日本箱庭療法学会第25回大会
2011年10月15日 東京フォーラム

西村喜文・山口千貴「児童養護施設入所児の箱庭表現 - 虐待タイプ・形態別分類による分析 -」日本箱庭療法学会第26回大会
2012年10月28日 島根大学

西村喜文・山口千貴「児童養護施設入所児の箱庭表現 - 印象評定による分析 -」
日本箱庭療法学会第26回大会
2012年10月28日 島根大学

西村喜文「保育現場におけるコラージュの活用」日本遊戯療法学会第19回大会
ワークショップ講師 2013年6月29日
京都文教大学

西村喜文「教育現場におけるコラージュの活用」日本コラージュ療法学会ワークショップ講師
2013年10月5日
新潟青陵大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村喜文 (NISHIMURA YOSHIKUMI)
西九州大学・健康福祉学部・教授
研究者番号: 40341549

(2) 連携研究者

森谷寛之 (MORITANI HIROYUKI)
京都文教大学・臨床心理学部・教授
研究者番号: 60131257